

人力と出力 佐佐木定綱

わされる戦時は、この時期でなければ力を持たない。
たとえば学生運動。

- ・ガス弾の匂い残れる黒髪を洗い梳かして君に逢いゆく

(道浦母都子『無縁の抒情』)

インプットとアウトプットということばがある。日本語では入力と出力。人間は常にこの行為を行っている。道を歩いていれば、曲がり角が見える、この見たものが入力である。入力されたものを扱うのが脳で、この場合、曲がり角が入力されたので、曲がる、という行為が出力される。

短歌を作るときにも同じことを行つていて。なにができることが入力されると、短歌という形で出力される。

人力が変われば必ず出力が変わる。動物ならばだれでもそうなる。いつもの道を歩いていても歩き方は変わらないが、突然工事が始まって大穴でも開いていれば、地球の裏側に行ってみようという冒險心の持ち主でもない限りは、穴を避けて歩く。大穴という入力があれば、避けるという出力に変わる。

そう考えると近代、現代短歌の変化は入力と出力の違いにある
・突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼
・成長、バブル……。たとえば戦争。

(塚本邦雄『日本人靈歌』)

初出は昭和三十二年なので、まだ戦争の記憶が生々しい時代である。生卵を割つてしまつた現在と、「かつて」という語であら

ガス弾は今もあるが、現在の社会状況ではあまり使われない。
学生運動で警官隊との争いがあつたからこそこの歌が生まれた。

今が激動ではないと言い切るのは難しいが、以前に比べれば安定してきたと言える。大学まで進み、就職、結婚……というレールが定着し、安定した一生を送れる時代。送れてしまうとも言える。こうなるとある程度までの人生経験は「誰でもそうだ」と一括されてしまう。恋愛の悩みや、友人との軋轢、仕事の苦しみ……。大変だよね。でも誰だってそう、君だけじゃないよ。それは入力が他と変わらないということである。

入力に変化がないとする、出力を工夫するしかない。現在は特に出力の工夫に重きが置かれているのではないか。

・勝手ながら一神教の都合により本日をもつて空爆します

(斎藤齋藤『渡辺のわたし』)

・——これはなに／此れは貝殻／——それはなに／其れも貝殻、
みんなかひがら

(光森裕樹『鈴を産むひばり』)

近代は激動の時代だった。戦争があり、戦後の混乱、高度経済成長、バブル……。たとえば戦争。

今は中流が消え、貧富の拡大が騒がれ、就職結婚子育てというのは古い固定観念となってきた。入力はどう変化するか。